七島紀耳

完

ル 4
3976

門 ル4
號 3976
卷

早稲田大學圖書館
第27.3.5文
藏書

ちご
ちごゝとふ草をとして
ひさしくして
ねもを本のめく
なりて大きなる
葉のもとに
名ハたうし
葉の形ひとしく
似たり

為朝明神鎮坐

八丈島より長しとゝうもの
ふ四そ
ゝらくいねくのゝく
ゝりてききよのゝゝ家のやまあの
こすゝるたけハ昇さて　ゆゝ一枝を
わゝせハ四気つきゝめてゝおそろしく
とゝるゝゝ　ゝゝくれよくのゝゝるゝ昇せ
つゝをつけくゝりゝゝゝとゝそ　盗人を
ゝりてゝゝゝゝゝ
流人ゝゝひて
ゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝ

新島八重子
いそ三郎
れ兵衛
農業ハ女のとり
女つむぎ
かもきをとるもの
ちゝをくべきもの
えれつむ
もつ
つぎき
えふ〜めゆ
出仙宮

大和国にうたに破戒鬼としゝ物を殺生する
たくさん出ありいそがきとなりいそがあるにそがきと
いうことを船すでも日和さへてあるに毎の
数かずとにはあるまじはゞ先火を
たきあくさりて阪とらしてゐるまゝと
物と者は火を焼め阪をたきて
いろりのそばへ出又たきゞを毛
かくせれば船よ新えとおそを毛
なくとうとてかりうもしそうき柱と
激いひさて男ふよ狸く祈りふ
数ひの物あるら其ひくちを
とて出ちといかゝと作くねと
かゝうあるとまりて九そざう
なりとて

生ゐ船ゝとものゝ
ものゝそゝそゝて
かゝるかとちゐ
あんと飯きに
出ゝき なるおそ

嵐とに生きゆへ
なれとふせくたゆ
倉をゆっとさくして
そらへつたのてきねと
つるぬき嵐ののぐるをとる
そこも地つぬぐ行て
のゐる時ふるつきをしてのぼる
そもー嵐しまいらーの和を
えんらひつくたとい

世に行くの七島といつるハツ嶋も和ろう沖中に
有らゆるも小笠原ハ西蛮十里の沙路と隔て
品可新れるあい蛮侍ひゃんぼりだ母ゆして居る
りんなる紙しさあい七蛮のつきんなる彼蛮に
侍るのの世に先づ立うるさうひるうとおりの
おうてうるに出立にるれのうし四月毎にに
ヲと立て西洋のるるうう船に乗船乗
ぶる言の花もけ七人と送る毎人多かく浦花
船あて蛮侍する船に乗船に送年人くい

金陵と行こうて昇へ出る舟に乗て
芝乃おいとの船を
の中に張く乃すすみ
卯の時に帆を上るあ和の国浦賀の
乃乃浦とおびゝ高に風すなわちおびして西川の
沖に泊る寅すゝ上ゝ
和の国に又百隻風乃くく船出す沖川の渡に
船をあすの船のもろ〳〵に乗人乃
人の家に移て船公方と称の家に書
国をて家定め時分に用う方の船の

上乃に家状を認て陸地に届る中に
乗て出に陽乃し髪の結く枕と傾けぬ
十七日風もよかぬい今も家に乃ゝと
午の時五乃頃振れの乃ゝ乃風強乃
ぐとゝに用さも枕ゝに上沢浦賀まで
祝遠に未の時に家に届乃家に江戸人出
乃船改め家乃川し必ず出る れ乃今書い
船に乃沢十八分間ると活て漕出さ乃乃
三崎の南を巡て小網代と乃ゝ沖に船を

ろこいてひらびたる孔雀を富士山に
傳人を後に出て地引と云網を引日の前に
立て置し地引網とは長さ弐百
又目の前小魚数百尋すなどし
たる仙地して傳人に取りかと降せて皆乃ぬし
小部屋船の後に俵を開て内の白
鰹を俵に入れ俵の口
鰹を俵に入れ俵の口
在と云所迄く長き石垣
鰹を俵に入れ俵の口

[illegible]の所より風強く
[illegible]と帆を巻き未の時
[illegible]と時[illegible]
[illegible]三宅島[illegible]
[illegible]と引き[illegible]船を出
[illegible]船[illegible]
又[illegible]
[illegible]
[illegible]

の海あらいぞとさ国もあり流もあるあい堀と
物に西方の国に出んとそのあのまもけるで陸奥
の海あや屋屋りんとあも堀れうこと葉と物に
すけ上に西風の吹玉ひらんあい南の海に有てあん
あき角ひらい言羅りろこて出るもけいで吹と
屋の北あ屋ひらしと心あいれりとかさこて船に
きとぐ海東と思屋や高い雲井に浦で沖津波
あで用あさつぐりあのあきといけせん赤るおも
すが船あ付りかとそして働けぐもその甲斐

出ものりしが焼かさりう海の上陸のあるり方
南くこ宅浦のかさく漕者る宗人収びけのにて又
風云ふ新角の大浦かと頼の中に古高近く
ありなぐ汲俊けくこて書るぐもけ京又東
の方屋明堀れぐよ是をせらひあざ世風
定ぶあに南に出に市に屋あの加にて船
と書ぐき方屋ると物に和くて見ゑもされた
船あ付りけと書ぐこそあ船の屋め拍
にしてけるき言ることはかとあき海東に今言も又

陸の方なる木戸の内に居る時は大海に近く出て
一里ばかりとゝのゝしと云ふ風吹出たるさらく
行立の国うあ嶽の国へ行く途中船と近く行き
玉河名と云ふ所にて帆の いたつさ名後支
と云ふ所にて只よろしかりける山地ばかりなる船おも
なくて商ふ船の多く陸の方にかゝりなれば落
りかたい鯨捕船多くして皆鯨捕をなすと云
に沖中にて皆商人にひさぎ来れる魚
肴の魚也一日二日持居るもかりと云ふ事に

船とゝまり風かゝる陸につゝきて陸にあり
鯨捕三日有とゝ陸にあるのかさらけき
行事無し浪かゝるハ天和とて見て木こり居て
いとも辛苦し公も居いとうこれ今あるもこれそまる
木居世の言葉ようる山に居て木小
の風なぶく岸の陸いと言るし仲の方と出れい
白関とつきてわれ神ちの切へこと道うとで
公りり直風の船いて四の度へと出るもかる里に
風なぶく岸の陸に船と居て人の氣

家をこハ綱とまゝ為あ
ひとすれ為り綱と綱とす
脇（行の計とさして計にう
ゐ迫も強せるとゝ計計を
ゐ晴ゐ風ゐ船と生ゐ
柿落とゐ船に為ゐの日和作と柿落
陸地の方迫とゐ船を推ゐ船に乗て
皆ゐ山船に乗て柿落に乗され為

陸すゐ日和ゐして十日中ゐ
為角して家ゐ為ゐ日和ゐ
船に乗て神宮参陸
択と為沢を経歴の風
ゐ嶮ゐ也帆と上ゐ
伊中の名ゐ船ゐ乗て
中を家家と船く船
乃宿と三間半積ゐ
重ゐ桶の上石貴用も

慶ら人をそなに小網代ら船と出して三日二夜の
私のかたらしかるしにも陽つあぶも風るに乙つ
らくこの時中に新角に上る事の風ちれば也
こ宅浦さしてりに市の時るる頃ころ付猶風ら
れで只角(も船と角ばたちに小角とかに私な
く言てらひ月のたまくこ言間にこくちもいろ陸に
かくれて青雲の時光もこりに西京と兵庫と
のこ頼てはらるに紙屋のまゆく八幡屋あ
八丈角不の加もこゆるに旨人はあるる陽るるさて

船子庄八丈角といふまといてわるものとふ言れ
ても八丈角とのさやのを必ぶーも弱めといめしとか
さてとするも加しこれ浦ぶとこ言
こいふを紀ぶこもみおう弱めと石のこかのて
仲はのちさとの船くるぶに陽しらんとこ言こつ今有
ら為かを光まるうしに今ら心のかしるけつれ
ばるうあけ八丈角(恒るに心のこうに作風る但せ
てこ午のこうとさしてりべしと言ふくちのこと金に
このあを角も船くも船く果も初ら海のあい

世にはまれなる限りにて人もあまし時節と
うけうけるさまあらまほしく探りぶぐ是ハ探
りあるものもあれい為と学ぶして南の方果もるき
海に流れて行方知ら船言らはまさはると
知れる流れる船の南の方へ流れも行先を
湖面とてぐぐ行如く紅成る赤海と云とぐなる
赤海に流れ入い海なる仲りずと云迄流るが
八丈島へ漂船の者ども二人ぐ為ば家
ぐして十日ばかり経て船の赤海に入ら人
迄もぐれ命ありはいとはらら悩て有ぐ者に
く酒のみ肴喰すぐ初れ行ものが如く唄ひつ楽つし
て往死と待中さも徒風候ば日本へ漂ふるの方
ぐ見ぬ程ぐ為ばの紀ぐ為さの頼るぐ立て
只祈りに祈りる仏佛の情引ひ為ひ為南
ぐ仏番いあさと人ら方伊風為て帆上るなだ
ぬ為で雲も陸ぐ為ひと立りに立るな
ぐ為ぐ為にして岸に着ら交る仏国や日本ぐ
と国ぐ流れ八丈島ぐ為ハさハとれ知いとも

さかき置かびたて船ゐどよすぐき岸のあたり
もかさかさ正面ごからあしびて参て亜すぐき金四り
乃ち言うり出方ふかぬ船のゆるいかる石付乗汐高
入てかつらね高ぐと乗汐と落て坂し小丈番ら根
村組沢中さう小丈番の小番名平村名中根等
けふ人の右のゆ作ると学ら中ると当ぬ拵丈作
ま船者つ正性二れ坂つ五番の方と拵慶
とふ寺中の方と小丈根とゆ青内拵慶ハ船
の出入あらあばきに船と言へとすれ汐坂くちか

乃ち小丈根に付常に番の浪のもづかき変こ
れ和ものも知ぐしてあふ岸近く高ら船もゆ川の
慶ま波かるくとき時いはるくとあ人くとあ云
かるぐしても船とつる付ぐ五の国お慶の国
乃ちへ船と高して遠くの汐強にかき免見番
早船もかさま拵くあ是と玉高とゆ人ぬ
小丈根の慶の西南に峠乃ち岸にくるかねの如き
置の方つぶらさまはつるぶの山ものゆ面し船
と生入れで左右の岸へ高の沙間中ぐでハ浦

ぬ陸と上で入るのあい保あも岸陸上で岩さい
乃て船ふぐけて保どつのぶ弟とすあいるの探い
見ゆて船切て出ち船ず船のぐざるるかかぶ
岸を遠に言ふて船橋のよう巖の中へ板
川板ーたる可板常のぐ板さて探るぐさ見岸に
付ふ焼ーそれ岸ものるも見へで赤ーと
平屋の今を山岩く船の内あしのたし祈ぬのこ
とのの生ーてとごもの祈ぬるるもで祈命
大祈ぬと成とひるンのたるも義し保国の岸て

もの乃れ船てるを陸の上れつるぐて亜りのとの
見ーに番の岸ハ陸ふるく天時初ず陸のとき
乃川ふ意るのあい赤て陸へ引上亜祈番の岐ふ
番人ふ陸ひ引連生て板へ入るぬと板ず原上
ぬ船にて八重根ふ祈過ま前塔の陸と以
細へ引て迎ふてこハ船引上ふ保ふふハこあふ
遠陸るる百前板ふ船を岸へふ原ンのも
陸ふとンそぐ引上ぶて中ーて陸つあし風出べも
ンそ陸風ふあバ一祈ぬ平ハ恵岸に引ふ中亜

拾宇橋寺と云浄土宗の寺に有り定ちぬ
実為に寺二日乃ち船のひとりの手い長崎寺と
同じ浄土宗にて素より肉を食事と
云て免度夫を為に聞に かる遠き海の中に
ひとり有為のあい橋を為い偏成為りあい也
但僧代くるのよと傍らて此の橋上手く生して
佛の道学でもて後世を願かして永く
仏灯の絶ざらんをと願ぐ為に寺のるとでなる
りの寺船川上る也浦に出てうるに新石と稜

船のあいだ為に川上べき為に成れ村くらう大
魚と生してかくさとるんのあて長くみて
やしたて拾ようと橋のて引上る此為元年の報と
思ひ為して鯨を寺と云ものの食とする所に
大方をやせ裏の乃ぐ孤き隙日カ病出して
引上て家れ之有鯨を為に有て葉
を寺の食とする振を三年と付て煮て喰ふて
凡拾人の食に為に裏に成らかし陽の如
く成ら中へ乃ち為ちさつ刻入加水乃る為

ろくぶいとゝのあと五入て煮けるとぶいとゝい鶴
もろ鶴さ煮るとぶ色〳〵の魚の頭脇りさるとぶを
湖水ゆつけ行つ乞くらくまゝ体所にて水鶴
もかくぬくもさあとすりかの千人に合中の
まるかのいたく鹹なのこゝあて麦を有う江ゝ毋色
ゆ足と雑水とゝふ角人の常の食ゆて飯を拵て
食なかし山色にたひて体のうるに元もたれね
匂ひしてなにとのんどそ通ぶかりあゞ母脚近い
あくやくなたまゆとゆるぶこゆゞいあゆ又海の藻

色くさりて湖水とりて煮て食とぶ又角ぶで也
根を芋の如くるゆと山ゝるゆ川て住煮て仙よ
入鶴て麻の如しかくれ色て口へ脇巴丸吾にする
若崖ゆつあいかくくたぶきゝる足ゆぶとゝ色
るに天南星るゝうさあるゝ天南星と食とする
まゝゆぶゆゞかくゆあゝも脇の肉一入あいくとま
ゆぶるとゝかく匠かくきすぶゝ脇が旨ゝ麦て
いゝの和の千日和の鶴ゝ免ぶとゝゞ百姓も
らぶあい生麦とい云脇すぶて病の若郎し脇中

一茅ぶきの人家に用のうぬ人とて名を人
邪し中風病いと稱しかりとしのても有りんとで
なかりし産婦くして古へより紙産婦なるし
角の風俗あて血の褌と忘れもなき高砂里
毎に角やとの家を作り毛の帷子を
如きの角やにさの子紙して褌とさ名ゆき
屋如き産婦はかの角やへ出て産と結右と以
る如く紙産を絶てあるかの角と産して七
夜とるまで出生の兒とぶきて家に坐かの如く

成敗に家毎にて産多しとて多きは十人合
十五人と産とて陸産へ出て同じ人数かの
なりの貧ぶきかの角や出て常に陸食と飯
かの角い食物の毒とあるなり又世の中の多き
つ出りすちなかの角い大荷と初産又古へより
金沢の通用かの角ぶ金子心産へ先にも角も
心と産すなかの角生産なるかの角から
仙院の紙さかの公と角ひぶして養生の道に世へ
産なしなりかの角ぶ角の角い色紙にかの

まことに おなじかの草にうせかれぬめを食
又ふとりすぎて形體すこやかに色紅の
害も侵きあやうしも飲食男女の交合いまこ
しまうこに常に心をする而の天寿と保り而
ハはしさかい男女の天縁も常に思食と食思
と合心を考すれ化に陰をあきらかで是而実陰
陽をしてときて養生の理と云ハ初に似ばなて
女の陰門ハ不淫水とまた又ふ毒とまをめる
交を施てせばたまく淫水不乾ハ女ハ陰と

きど心をよとせば右に まの不乾とを尺
を国地ものと女と割すうば如しまを淫水乃ばいを
かき先を見るとあ古へ女陰の形ちて初ちて男の
陰ちを陰の送用ハ女をかうしすくるとを乃
かとをよ意と存ふるに成を かさごと云意
に似て色を陰ハ紅ひ赤き意多ふるもかか
乃ま綱ろとを新ハ海底に珊瑚の
有て化して意とも成ふ而今ど部れ有ふを云く
体をひて免でたし又ハ天の綱とを意乃ふ綱に似

て是ら池多く集りて之を陸奥さぶ
奥羽の列 羽黒 鶴ヶ岡池 月山
を那し海辺鶴もろ鶴の鶴ひ多し其外
陸奥ぶ玉に先の月山の麓のこと
かるる那しと十万石の小名 酒田 とは
しの高に富りて富の利りあり 採 酒さまかる
酒かる高あしかるを 結 酒 玉すものこの那い
川の陸ろう 訓ら 業 のあいてを感じ
ろの中に貢の 採 酒 高 酒 酒 引地し家

抑陸ろう 彩 の陸 酒 玉 の 酒 酒 玉 光 中 抜
酒ら 結 と 実 高 と ふ 云 沢 て 丹 陸 酒 と 云 其
初ら 丹 陸 酒 の 酒 と ふ 布 て 酒 和 ら 布 や
陸 色 を 思 花 黄 の こ 色 に 限 る 光 色 の 多 光 酒
人 を 蘭 色 と 云 ま ざ み と り よ 木 の 陸 布 し 陸 る 黄 色
を 加 ら 中 を と 云 茅 布 し 陸 る 黄 を 雅 の 手 の 陸 に て
陸 る 抜 加 ら 中 を と 云 抜 岡 池 に も 乃 去 ま と い 多
り て 黄 和 の 中 を ぐ さ の 如 き 多 し 右 三 色 と も
乃 陸 る ど こ 云 那 し 陸 黄 つ の 多 那 く み 和 す

夏おし呂陽に陽る夏元子亟陽にして色と
陽ゑとよさおいこう茶高屋ひすきても色の茶う
なおし さう須う高家の八王子上地の桐生
ゆうう八丈角として織生す織八丈角の産に似
たるも陸奥の吳服ひとせとまぶして色
かいう陸奥はいうう八丈角の糸色とつや
すぐさ暇ゆうおで陸玉屋かるし減るさ
石屋の糸元高價のたうとおで新幸のもい
宮島はかうとおく商人のゆいゆく

ゆうてひたすらたゆふの値さとのこもひとう
なに織物もやさうとおく思うなるげか
ら方さ言葉の家富豪のりの主蔵とゆう
思ゆ高價のたうとして国の費というもゆし
とゆうう過き須過も八丈角を出るさおおてさ
まの者の者ごきもの思いはずとそのう金地て
ゆんとする者もゆうはに今を價はしくて作
くもかのゆうまに新もしとと八丈角と帯なと紬
足とゆうに價の値段るなとれて上物の者のか

うの祝とゆう名を古きにならてこゝ移さは
しるし南時の利生のこさ立ちすれ近国なる
者ども海産多しこれ所を離るゝに人民
味ひもなるにゝ味噌と云うものゝ多くなりて
者とすべし又是中海産と云ふ形ち異にして産
こゝるどいつのゆゑにか多く常の海産ゝ和ら
にてう酒し又さこ多し角ゆしをゆゑさと云
潮水ゆし奥て角人の食と成にゆゑに味ひか
ゆゑてこゝに新て産にくさこ有難ち雑海産を

奥こ那し雑かさし江戸ゆし古者と云ふ類ひの
ちさ所を補くとて市ゝ立ちる市ゝ近かるゆゑ那し
市ゝ所角望殖まと初ぶ望と殖也ゝ所ゝ
同中に古の今を作る潮水を汲入家のもく史殖
移に底に居かまち書て望とゆゑて石に
薪をゆるさの外に行し人を移者の学と成ぎる
此紙の望を三ゝ所の初ゆい也も角中の用にを望
ず長ゝ望ゝ立ちゆゑい潮水を汲て朝夕の食と潮ふ
潮水を味ひゆゑ食味と移ふさゆゑ望のさゆ

きるものの食たるものやうるたるに今ハ恩澤に
よりて繁盛なるとそ海に出るの幸ひなるや
世ハ高根村の大成長と成りて出て持てゐる大きさ
三人四五人迄の迄のひわれの如くあり裏に死可有
甲に張弧の文あり唐ちゐるものに陸紙なり
只甲為し因多く使ひ池多し云所へて多
池とする又鏡の池とも多池とする名鏡と長
とあるあり池をて拭きさまあり迄とで
拭長ハ磯辺の多と脇とする所磯辺に陸と

生と風ひやすとあるにて実て元長屋と
磯辺の多と喰の和と陸の多ら処まする甲と
実つれて磯ると辺玉沢るの方めとやすの先ぬる
やすと頁那が海底へ辺入ると三本のやす甲へ立て
接ぶる五ぞ辺も網と引て辺切縄の有丈辺し
て中吉縄と磯辺の多に陸ら縄ると人新家
に陸る一長多して陸る鋼切て引出るにいとやす
磯辺に書多の実行ると引出て上に力陸して
縄と引切ると又長と多に別に一刃の手陸有と

ゆえ泉の泡もづき紙と能仙人の如し仙人海の底へ
くゝ入海の底ふかい泉人と為れず仙人の石泉の底
と先と高き泉と成れば指ず内ゟ泉の頭の方と
尾の方へ水と成力と一ツにして引返しゆくと云る泉
を為さ迯玉ゆゑ乳返るべき云ゝ分ゆゑゆくと云きなる
ゆゑにて只一筋に水ゆきて迯る為海底へ迯入と
ゆゑ四方ゟも高ク水の上に浮き出る為迯ふ人く
結て手に能ゆゑ弁て引上るかくして泉ゟ変迯
き陸ゟの手段と為て蜀の人仙術く水を付蜀と云山

乃ち古へ山徒乃石門一枝の中に山と云乃と
ゆゑ八面不背にて陸も冨士に似て冨士の富
士と名付乃と云ゆゑ宮殿浮く風も強ゆゑ
出山に参乃に参ゆゑ上ゆゑ高き為ゆゑ強き為石
ゆゑ絶頂に宮殿乃ゆゑ常に強く立の宮家
古に似ゆゑ形と云ゆに似ても国の方の月かく張る
く遠ゆゑ為ゆゑと云人云ゆゑ中に
冨士と云で陸の国名のかゝみゆゑ也
ゆゑゆゑと云ゆゑ伝ゆゑ為ゆゑかく迯と

山郡にて可遠き国へ流されて居ると云
事なり那く住人の山の中こそ深けれ谷にも西に
傾き乗る月の出山と云ぬ共なれるかと云事那し
京郡に大賀郷と云所に住人と云故有
絶壁の間に道と云行乗る岡の人を置るすがら西に
永行衛と云ぐ参る日国の人は元亀年中京都
と云のぐ出と云つ参りつする山国馬那し熟
と云い牛猫龍の三色に限りさるいはく歩熟を年
のこと所の鉄絶て那し龍を見し龍に成

絶へる龍と云ぐ長ざ長い物と云て
石龍と云ぐ長と云川ぶと云又山猫と云物有云
形常の猫の如ぐ長かの有るさ那に山猫と云
家鶏の如きこの人家に住多し猫ぐ物長い
歩を出たのぐ玉を頂根を出るぐ猫に云れ
ぬ心して龍陣を出る年の内ぐ出かし猫い龍
と云食の又蛇石を食べて人ぐ云報と
食を禅ぐ熟はいぐ多熟はいぐべくも乗ぐ又岩山に
天児と云物して人たぐ加脇すとぐ岡地の孤つ

きりどうのごとくぬるりくぼしなる石のごと
天児の面のごとくなるものをもて祈るなり
きりをえてあう若山猪の牽引なるものも
なるあり経川のあるものと同じ天児とおなじ
行あらて書ひたるあり祝者にあらず
ゆかとうらでゐ地にあきとうかはりと畑にあき
ものはしり只能よ山のこのしみ蕨をたきく脇
足しうく光て人の家に来て家をあしみ出家し
出てもの白鳥とゆかりて人の家と孫のあり祝と食

物とで家にあらと初ぶして口と腹へかくの如
心とで足と腹ぐ速祝の元に塩と入る家石祝の
祝と洞あて色玉付番に洞ちて出を石信に
清ものぶを地喰の頭呑るでするりとをめり
喰面の上と高ら仲所すあい歯の中へ口と入る国地な
切なる石皆洞て番ちて金鬼かゆきに絶ず又ゆや
しとの出なて人と刺さあら正なる常鬼と
禁なるる近戸陸ものなるかぐる衣類洞なるでか
りひやべしけ番田国なて石鉢ちとのれぐ一口

海岸に風強く船出しがたく侍る島とおぼしき所なれど
住む人をば是とも思ひのたまはざりしかば
といふ海中の島なれども山の半の新しきまでもたりて葉もかれても根の
残るさまなく生ひ繁り年中薩摩芋の種と
蒔き殖へて五年に成て今は移人の例と免ごす
門戸のいとも粗末なるやも居の上に草を葺て
妻子の繁昌しをれば家中有とても
み飢寒まで若し年中とも云ふ事無しと
云ふ世の中の貧困に成て尖角は古への如僕の島
へと云ふ人今に生存する如くなれども国地は
遠き加世屯風俗も大に異なり江戸の様とも
竹刀しても其に習ひの人はおごれる
しかぶかさち思ひしらどいとて清り気なる
の風俗と変ふ事無に
わのしが一番の風俗にて指ひ国地
の人にさして習ふ事に同の中かこ
し習ふ様の人方皆和にして仕りかぎ

又夏と冬とは国人よりうとおもはるかく四季よ
載の古の風俗かくやうなりとぞ云ふ爾の人は年い
くつとて問ふに古冬は数あれども問ハ爾の年
あやるど見出ぬ云に又何爾の年にやとゝい頃と
傾けて爲やあし悔やうゝ云ふ所に毎の云
しふ慣う花の年とやうゝまず慣ハ花ゝずとゝ
しかて皆かゝ見とゝ思ハ爾ハ爾ハ爾ハ爾ハ爾
云中にもかゝ云ハ爾ハ爾ハ爾ハ爾ハ爾ハ爾
云語直ず紙しかる云分直し紙しかる爾の云葉

のうにいぶしかるもの慣ハ慣ハ慣ハ慣ハ慣ハ
八と爾ず雪海ず氷ならずなまさに雪結の
ゆるゆるとしもうゝ問とゝの茄子ゝの茄子ゝの茄子
なりてもかゝず寒と強て言とゝ言ゝ言ゝ言ゝ言ゝ
も立のぶらさずぶる茄子ゝの茄子ゝの茄子
しゝ又ハ天角ハ大洋中にゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
風の所生るゝど時の間にかゝて定ぶりゝゝゝ
晴ゝと見る間ゝ爾の陸ゝ風ゝゝゝゝゝゝ
ゝ絶て爾も風もゝゝゝゝゝハ一月に三日有月も有

ある日も昨二日大雷大風雨竹木を折て家
居を揺動かす由なれども嗚呼近かるまの長い記さば
七日頃より同じ事にて雷風雨竹木を折て家居に
あさ深きまでなれど国地にかくばかり只今報ずる佛に
夢石ばかりなるあれい多重も同じ乃たまの
雨水あり腹とうて変の庵かこの芝重につき
て花くらも差さも男も女も手を合てうかまを拝ぶ
男を屋ぶ也稼を多る而如ちやどら也いとも
差を多と石芋い国地の如き高きい用ひずか
ら免て稼存業のしるき事也所かく呼くた
ひを拍子拍てこを事のあきまかる程にかるなの古
けるも免ぶ也又牛に角今在て腸炎とうら出る
毎年毎に多の拝びこと多牛の合面炎し也
芋牛と酷養ひかるさあけ拝びと殺ケた
ることとり国地也しい麦重の類とかひ又は毎に皆と
男ざおいか猫こを子に強ずと笑ぶけ高にて
を草のことかひて悪ぶ牛家よつあぶ捨
乃牛商ぶ肥かとてか海国の牛にまきある牛い

ゝるとのゝ当りあとゝ[illegible]に爲の牛にかりる事
國の馬にかりぶ爲に話す少の富士の麓に牛
山と云所にて牝牛多し牝牛を力仕事毛色艶
やうゝ個牛のやせられるゝ牛山に放ぶ中で肥か
とゝよみ牝牛をもて個牛にする國の牝馬とい
違ひとたけく馬くらもすれい人物の中くらい色
ゝゝとゝ紙し是とゝ[illegible]とする時ハ牛山の柵に
所川の堀の傍さとりて見るとかける其日邪にかれ
で堀のびゝ牛の口に酒ひして近る所手梅へゝゝ[illegible]

ゝと傍き牛にても堀と川伊ゝ邪し大騒にて
牛山それ巻ゝとゝ牛と能免定ゝ遠巻と近
迫て日邪の行方ゝゝる其間さしゝ牛日邪近く
ゝ傍ゝ騒ゝと上てゝ牛を柵とゝて近ゝて
日邪よかゝとゝ其牛さもかゝゝく差迫て日邪
の堀とゝ川ぬくべき邪ひゝゝい人の力ゝしもゝ色ゝぶ
其時に牛に長き堀とゝて日邪にかゝゝると牛
の例ゝ中さまでする傍ゝ邪の成が牛とゝる少と
差迫ゝゝと止歩くして日邪の堀とゝ川ぶ牛の口

世に番付のるとて当国の番付に外家に
つるぎて口おとをぬかい国外となるみひとのもの
らきをあらう男外に合やぶして如外子と屋むとを
又角人女とひとびてもたいををおもをを糸ををを
ををぶかくぶををの陰に入るくの陰糸と陰多
をの陰に色をををの女をの心よ陽入とをへいまををう
砌山陽ぶかいをのまを陰をとをけを陰矣の陽
矢の言をに似て又男陰とをゆいか女をのをを
陰にまを女陰の角へ男陰ぶで男陰と新くを出して

男のはきををの男陰をを書に定をやを云
風俗の拙れるを中や十四くを十七回でるを十七を定をらく
時て陽静をを矣角ををうあに角りて一里ばをに
小角とて五一足の角有を細四外の社ゆけ角に
外に右船のをるぶを拙るくを船にて外ぶを陰るべ
きを和るくを口を陰るが外をを中小船を帆
と上て宮玉沢を上て元中を見中角をいをぶの角
遠外人とをあに陽を流くして岸に陽をるで下矣
角のをををを山沒とをあの有て陰を陰るが陰を陽

海の中に川の様の如き所をたどりてゆくやうなる
の如し是に高い船を
遠目にみて見付て船をこうと迎して山沒月出
金沙船にてからあげて高に乗かく迎ひき荒
波と角人まぐろ日毎に出こみいたとそこに角人
を見付て宝ぜ波を高りて船ばよりかげ元と
する所へ海に花入らかりたる船と引紀して
又宗かく迎ひ多り水掘れ来て居る日ハ稀
にてたまを見付ると云ひ角人ハ角に陰迎して

登るべき道なしたゝハ高の上に菊花かと
移うけ居して道とたゝらに磯辺に船の来る所あるハ
日毎に吉様へ船と引出る兵庫人免ぐるべき
ものしに石に成て居に角人の男を
きと高のかを開水とに成てつるに熟きて毎く
とり登りいすれば角水なし男用に清水ゆれ
ども常の用にたゝるを家毎に大成かめと云て
ハ家にて左でとしめあとつけて石水とを行へて食
とその日を暮て毎日ハ水絶る所に人角分

水を運ぶさまは、蟹も陽炎ほどさすらい、梯子へ
し、平地をあるいるが、沮とゆて家を作て住ほ
ひるぶ、三尺高にるるい那く、拙ほど少なく住ら
牛と川へさ運ぶ、人の力のみ少し、農業と和心
かゝる組も住び住るものゝ那なの三国辛苦ハ
大高にも船乃ゝと見かん力強迫にて開闢にゝとしきい
石と松のなかとよさらい海底ふい開闢やゆんと
那れさるる人なつれぐもゆるしと知ナ八ナ九
ふゝ河高の居人、ゆゆとるれ方やセ

裏の色黄さ色て四五歳の人も見へ女中ふしなの
殖いらぐ衰くさるぐ、下称の面いそで家の中に
那常ゆ人も有又歳の見先て見時やきたるし人
も有又一山一寺とゆる法師も有み高有に人と成
て世の居月知ぬ人も乃ゝ時に今を高の人に成し
免られ乃さるのゆけ為し家の命とゆぐてかの
き年月と送るも若けゆて一家国に帰るなる
とまのこと積て乃ゝ家をゆるしゆと
るるる是ぐ、さちぐや皆こ川が帰るなゆ川てた

このさかずきの酒は為り賜びても右の先祖
親族の名を探すなるに
ホロロかの和歌い賞すの徳りて暁方
きまりの月八日に西ようの船の波の
八幡人姫しく文陽ろどのなるに俗に波立て
船おろす夏止かなるい帆とるじんとする元毎にそひ
こちらに第一生活ない稼ぐとで風波とはうるなり
もがかさ国の海商しどに俗べうぶ出るなり
又商人の船とおろす世生活まるがりあも毎に昇波

立て止仲を猪のもし風もようさが昇の波に乗
おろす夏付ぶ市ろまを村にみちとの者ろ年古
ろに南ろが男五人方見とこ乗世界とみもとの
又ちつさろ波ろ花巻して取立とだよりぬ中に南た
りさあ立巻踊と夏の俗べきとは陸近内和のなる郷
又ちつの心の作ものがん今い俗ろ保しなとろ公生
やはしと花巻しなる又の山より手伝もて新ひのさわ春
養しなる南の中にて毎立村い毎に山陸されのあい莉と
ろ常とかてすきひとちにみちつハひひさらぶひても

只落ちに日と言ひなすとあり。むかしの人や四五人にて兄
弟とうちに山に入て薪とうちあつめ或ハ木の芝新と又
山く採の出る所の石ハ木うちに採て切とるあり
時ハ半日の頃ハ迄死出て山へ切んとするに
而ハまと弟とも出て兄弟うちに手を切かハ
又の山ハ嶮くかし兄弟ハかるく或ハ家内十
人ばかり除て又の用ハ兄弟のこしてよの人家ぬ
るなり形し又ハ振村に兵ハらの所行田も畑も
有う所ハ絶〳〵ハ所ハ荒れ〳〵きが只

三人の振ハ名とわらこと人まに鋸とうりてよ
迄ハ行るゞ兵ハゞ山ハ木ありて鋸ハ為に
新家しハ所ハ人に成て農業とつとめと
先ハ石の水と限て井なしうまきとうる水ハ
ハと第又芋の新と世ハ人ハ家内一日の食ハ
只ぬとも又に正ハ人て採ハ食ず成れ
ハ家ハ食ハ食ハ人の中ハ食
で持て行ハ兵ハと限と家内
ハ米食に切て持行て又ハ正又病ハ

時ハ春も深ず明ぬれハ家毛りかく近き家窮
と嘆きて畜養一万貫ばかりも有ハ世の中
と考へ[illegible]市の産業ハ[illegible]石の畜養しおき
も方ハ[illegible]脇ものが脇もあるものとが畜んい
とも安く売けるこの家[illegible]の家と
[illegible]ぬかる畜ハい風地ハも[illegible]に角の人に
ハ畜ハ有りう郡市ハ[illegible]角ハ[illegible]年の方
三年ばかりに青角と[illegible]修ハ田加ハ[illegible]
[illegible]も免で[illegible]角ハ[illegible]の山焼生て

人ハ[illegible]死し田加ハ[illegible]
ハ有ハ[illegible]人ハ[illegible]角ハ[illegible]
角と[illegible]ハ角ハ[illegible]
ハ[illegible]焼生ハ[illegible]
ハ[illegible]と[illegible]
ハ[illegible]角ハ[illegible]
洋中ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

青海へ帰れば初めの角力と競角力のこゝぬとて
別れぬまと知青海く山道の用意のない水も茶
も全くさが日を定めて堅洋しなしまい船を破づ
るもかゝぶ風波なる成でも帆とてるひと食品と
して弁ばりの中に沖用の加陽やあれ
ゆく西の国へたらひ宿まりに入出て竹雲と
兼ねて三宅浦く恨ゝ西宮の風に帆とてるハ
主根の存に帰ら父よ書る見ハいとこの国ら
所ゝや又を兼てるなうと収びなる教者浦

右古へ八尖角に属したるゝ道遠く陸荒
く恨ゝまいて孤しされ家家と那く船人
多く死ゝ変ゝ為ゝ帰ゝ角ゝ知ゝ角ゝ
那ゝ左中で乃ゝ角ゝ仕到ゝ角ゝ
作ゝ乃ゝ角ゝ乃ゝ角ゝ乃ゝ角ゝ
変ゝ海ゝ那ゝ角ゝ乃ゝ角ゝ
相毎ゝ角ゝ力ゝ角ゝ乃ゝ
さゝ乃ゝ海ゝ角ゝ乃ゝ角ゝ
問ゝ角ゝ乃ゝ角ゝ八月初ゝ二日ゝ乃ゝ角ゝ乃ゝ角ゝ

移船も商人の船も漕ぎ出ておろす猪れ船よ漕船
の石巨弥て六拾人余乗り吉祝頭明石より八重
根の岸に出て寄港とおもふ人も多く出る
扨船と出沢口を言ふ所へ漕ぎ入れ陸
りの茅ヶ崎の移船のしごき乗し遠く乗る
その作に猛と加げ青き日傘とさす加賀か
ら花火てかざる国の奉公を致す
る加く猪の作を乗こが猪れ船よの年毎に切こ入
前代外と痛るとゆ少に寄て国へ出るもの又

加く国は止まし出切前の金屋あく乗のやれ
切前い前よと持てるもの方に兼猛前見送る前
岸の墨のさかを中と陸へ乗て孤島おいもの
かるとする中にする帆を上るとい船乗い前とかげて
見猛く岸乗い今乗切前の如く声と中に注仰ぶ
もとく成る邪と義れにもかく乗人用と置し
ぬ八月もよ中に成る沢言の月すみ長くていと
おかしく左て成成乗ともいすらし祝乗の人も見
るらしと国の方悪しく左へ猛し大空の月をこれぐ

京師の月をみてこうたをよみ千里万里
流るゝ涙をとゞめ五畿の月のかゝる家と
とゝ生ぬ名をとゞめてそゝぎ
ぬ
さて筆をとりて月と京とをかぶ
りたる事を思ふ小名の西行
翁人に問ふ事ありしのかゝる
さはらず用ゆるにて古今集乃
家多く所侍り大風ひ
せの中にあるせをあるさなきの
と家をあらし六月

ゝ清ぐ変とも
形へ剥所にてかゝる
ゝとよ為に侍さ所
とで宮福寺のあ
用ゆるにて所を用ゆ
新とひらする五家の
ゝ国の家ぐハかり
人なと強とも日和
明く和草拝ゆ
ゝ清ぐ変とも
形へ剥所にてかゝる
ゝとよ為に侍さ所
とで宮福寺のあ
用ゆるにて所を用ゆ
新とひらする五家の
ゝ国の家ぐハかり
人なと強とも日和
明く和草拝ゆ

又に国あしき所にて人をあれば胆煎をかが和草子
をして多有しを見るあれ悪き足を胆煎のあとかど
る舎人をして所をと舎人を見て足い大毒をまく捨
の人毒足と食の高い舎人毒にかゝり面に砕なるか
如くなりてあの粕く只一面に言にのぼる富のやね又
ホの粕をあの百天をのぶって毒のこぶ肉をとりるひ
那し舎人を胆煎して食のなまし まと知ぬ院人
国の天先じりとをひ喰て け毒にかゝる面粕く有て
人の知ぬるに言きあれて参る粕なりの中の粕と言

所をかくして一粕もあいま毒を砕見面毒にて
知るおそろく毒をひ用を先きてかるまをひも書
ず舎人をつとひ胆煎に参る舎と参せてその腸に胆
き湯とかけてるをと陳にかゝる和に毒ほ那しとで
たもかべ毒に用涙のをとで字福寺に有る院
人け毒にかりて粕煎の如く成るとをのをに毒た
らをいかゞ言に言て参る句あい毒をへて一同をホ
粕に和ら戸と望を同て粕と前し明るホををて
毒にや成らをと一同の戸と明るホをの人那しこい

ねはねはうつ様にて通りあやと見る事出来と
なるの所も那しの事なと皆人の国はうつの上
事なりて釜うつなる事人なと今高にはりてうつる
はなしなるもしてはかれとそなるもわさて
なるさまはなど何うてうと聞きまい
今なる如く家に釜なる事なる事中も知れない
うの自在にすぐうと美の抵なるとそね
きは自在うの釜なるうの時如き得うの釜なる事
和田陽とかけて所にはしうと信かうなし

さまなるもなるこの所二口田のうの人居居なると
云切て見る七の八月にて所ばなつて言く元
はなる事なるうの高て五彩するとかうの遠くの海
と高なるうの人の花も居なし居る口南とさして花る
はなるなることさて事なるなし角なる見てうつる
なし時も居なる事なるなさらに居なるとで
云ひ宝能時なるうの角人お五つなて角力とう
と見る前に入る如くうの報なしはなる皆やせて貴い
ではなる貴はなる人でよ見如れなど力を強し国

ちゝ母なる方に対して南方とそゝセたる年後の
角力あい長のかゝり那く呂力ゝへるるに孤れる
国の名まける又為長と船ちうと又船へ猫るどゝでの
貴ひび貴も物ちやゝムとろゝ牛商の儀とりり玄国
の人ちゝ活し法食して公と考すま玄那き乃ものゝ
為貴つるとちゝ力も法きゝ商へし世の中の極ちかゝる
金銀の為ム公と言するなムの常るゝ付為金銀
法の直用るゝ裏のるまとちとちゝ養ひ弟とちゝ
ちゝと為て衣食かゝるのゝちゝあい公と言するなゝかゝる

前にも之如くおゝ仏法の弱き方に紙老ゝ
裏にて面と作ゝ干つゝひて仏るどゝへもるき葉と世
裏の国ちまかゝねゝも乃へて解公ちゝけゝさ玄常
の人食とするかゝい裏の所を国の名所にもまゝゝて
光ゝ商へしつゝゝそゝあにけゝさ玄い国にても寄他方和へ
極玉て年と極たゝん玄い多と世ゝ又公年の能仏
るゝべしけゝさ玄の食とるゝ玄業天根の類と世ゝ
る報の名しゝ時にもゝて生命のまと成へゝ和けゝさ
玄に活るゝゝゝゝ仏極ゝ玄ゝ能玄ゝ

かたまりたるとて新屋さん人も有りて
ちり国しるにて九月もいとあらたるう九月の中に国の方
（海より）十日に入て八海荒く南に方うら船とト
さて出年の正月かつて国に帰るなけいとそうきさ
せに六月七月は毎に海のうしたもかつて者に
乗と客人ちひとがたる事ホラホラ沖に船乗
ものが出屋さして高るとしかまで岸に着ちハ高岡
船の帰りかたりかたる四の文も見べく国のなと多
（ト）と呼び名りにたる所も所く帰りかたる様子ら

国見ちちも今迄小丈毎にをおり居まで二と毎へや
帰りのみとて一年の文もるとしあるいろ悪しさで
ちさら市くいと稀に風ちれて船とトすべしと宝の
時毎る浦ろう様なる人を呼び寄こうく
に用てちに毎いたく降て船く切積入るなるぶ
市ちりあるも山たれど根の国ら船ちて今の
時に寄稀ろう帆とて押て丹毎の人ら送来
ご一里ばりにしかるとり船に乗て帰
中に船に刺ら若石ものを六人残り歩て帆のなど

長門の国から三宅浦迄はなるとそのまゝ海
道をうつたゝぬ所は迄わたれとも乗つるさまし
ゝ船を乗て乗て漕つる中まで船の右りの方とゝ
かりの内今を行やゝ迄海へ乗入り乗るどの水の
上とゝかゝくいと安くとわたりを先海つる船迄
行やゝとゝかれて長門を過もはるべく遠行ずに元
祢西まで三里を乗りじさわい陸地とはんなりと海
しとゝかもゝ又ゝかゝかぶやまうすかもうりとゝ西
南うつ雲紀て其中うつ雲紀さ雲まぐるる

又海上うつ雲紀の如さものまぐれ立のぼる雲
を行ずと間船あるゝ龍の開水と巻上ると云也
陸地のゝや船の上の雲と下の雲の如く見る開
水と切合れとゝ間上とつと云とゝ空を墨と
すう陸一雲の如く雷光あつく雨の降る雨れ
船のまゝゝ長門い船を乗しと間雲ぐうつ風
乗て漕つる海上強れる風船くゝも言云
を南北とゝて三宅浦さして行ゝ陸て義く船
痛し梶つる折れく梶を船の金のあい梶つ折れ

よかぬ事なれども人命に
代る事なれば門前にて見物けるに
とかく海中に絶壁六ヶ所ある
のぼりて事なかしまにて海に入る
一とせ四月の時節なれども海は穏
中にひとりハ居ずに船の通るを海
に入るの事にて海に入る
人毎に見物の時浦の石ばかり
船切ずわ船形被なひて中の居る所石
ばかり

此ようなる家にて四月中旬の空
りて晴たり十五日に行徳を出し一ちにて
新宿と利宿との間に信濃国善光寺の
出雲の上に雲刑と出かさく富士
こゆるがの事なれども雲の初ちう
実宿にのりて出雲の小宿のと能居る
日かすの事青宿とこそ和にて宿こそ
とく世に和く見し年中と経て四月を
うなしさ人々に他して皆人収びのの

香も薫かくゆゝしう多し仏人造る也跡半也
馬多しこの外名猫前のごとく猫も山多年
地かの市に薪と云の所と仏人出してすぎゆきす
二月五日に国ゞ寺にて立る仏前に華瓶をかざり
なを瑞門庭〻振鉾るゞ大ぶし会場に玉
菩多く云ひて居ける四方石の龍に仏王の画
乃仏前のうへに絵の画ありまた英一蝶ゞ筆
乃一蝶は角に乃ゝ中つれる中に画がきなる
ことゝゝゞ猫なるべしと事なれなて形しなる人の作とき乃

皆ゝ人出して寄乃又弥勒この秘蔵し角
菩弥の画形仏像と画かけり拾ゞ校と
衣の袖と陽乃角ゞ上手の仕業感じ又仏
宮の手に名筆天所 角光大師の財の画乃去画
なてしと先て乃ゝ仏画なる乃ゝ八文角
日本長柄の帳よゝ仏画絵と書ありて
袖にも猫にも乃ゝ画ゞさなる有又生福弥の
画雪比叡の銅とさし上て寄の風情いとおかし
蔭の二幅鉢乃ゞ名宅角にて書なるとゆし

ちけ角つはぶき実しゝ本のあさ山い一角につはぶきあり
形しも黄色の花咲つゝき葉のみどり色すてあり
し茎ゆゝとやゝかにて葉て浪又は三角にして根ゝ根葉
蘭といふの実しゝ角の花ゝるゝ色紫ひたゝらし風
俗国地にかゝるゝ形しゝ男ゝ船かゝぎしてにて人生
女の言葉しゝ角におゝゝゝ三毛ゝにゝゝゝびて七里半と
ゝ花角ゝ葉ゝ葉揚羽の名花ゝ国地に用ひるゝ大
かゝゝ毛ゝより出ゝゝ人の住ゝゝも山にもゝて
作ゝゝ又生業ゝてゝゝゝゝ年毎にゝゝ

送ゝて賣ゝゝ得ゝゝゝゝ角冨ゝゝゝゝ角にゝ
らんとゝゝゝにゝ船ゝゝゝゝゝゝ船にゝゝゝゝの
海ゝ住ゝゝゝ新角ゝ住ゝゝゝゝゝが住
ゝゝゝ花ゝゝ角にゝゝゝゝゝゝにして
ゝ地ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の実ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ葉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

是れを今を加那く佛ぐに極りなれば積られ
おのゝとしの尾ぐに居来して弗の門とゆくさめなる
也ちまゝ弗の雲の立なつものとうるて人のゐ朝
の山とゆ云出しゐて けるれて弗の四方をゆじ
とくく手長ゐ角とする角にあるれも成り
ゆくりゆるゆれよれて也院かとう船ゐして新
高〳〵に弗陳高のうう雲行うう角に空かき
雲う雷光し雷角の陸う振れ船ゐまとうう
也船と迎す四風強るて雲うこゝ毛孫のう〳〵けて

船のゆう美形しこゝ毛高うう新高く恢るハ花
遠ゆれうう船とゆしてゐ中の仲ゆうとゆ中く
高つうと新高に成て風止船りず多くの小船に
引せて陸くに着て切角く山るゆけ高い卒
地多くくの位西ゆ卒に中き孤ゆう白孤山とゆ高
一山ゆ白て雲ゆくゆう結ゐうるれくゆ打て
うの風色四えし海陳ハ陳の如きゆ美孤ゆうる
孤とものゐゆかれゐ陳ゆし出ると高人ゐゐし海中
ゆ孤のこゆし石四ゆれゐ綱引厳こ示迫ゆりて高

あるかなきかの風にもたなびく細
き糸とかいて更多大方はそれに
かゝるなれし鶏・ちゝ鶏孫多多し又二色の色
しけ尚近きゆゝしき神佛尚利尚ゆゝまで鶏
多し鶏命と多く割して白く生まれけ二尚へも陰
陽ちがう方形ずゝ方形ずゝその海色のあれ
うべゝ方しうあれうしてあるこけ尚風治ま
神佛と多く多し富貴と業と能命ゝ男をするう
しゝ又形のゝしゝかゝる神山に生て農業し苗ゝう牧

ゝ多ゝう縫ゝ又ゝうゝの子ゝ免成出
ゝさゝ衣ゝ花ゝとゝ焼ゝまゝゝゝず世のゝとゝのゝゝ
ゝゝゝかゝゝ種ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ずゝゝ女ゝ前ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かの川が移りて又さらに陸になる孤と成るなり
為て其三家し今孤と成さるさるなり
割して白人へ生ず又新宮山新宮し庭に来る
るよ又水仙花を家みちもせ植るどれ川がか
て常の家の如し高の陸なるもで業も荒も
さらえて見るもこそつきて秋の業の如
して喰て香年りて体ひとし又猪多く植て実
の陸となる今荒さうり国の春の猪ら色ら
是ら大禽へ居らんとすれば日和ら青もるぎて

十二月二日曇れ二日室蘭それ多いの風そよくと
吹て出もあさ日和ら出船とりて大禽と
かのるが風けきるかハ先行の国く陸く乗とま
ちて大禽へ居る居る居る居し出ぶ川に利
禽出るて風強るぶ大禽へと孤と乗して
山中にかの川が風止申の時ら陸い海てかぎ
居て夏と乗るの如く帆ハ帆拉くかくつきて
船出ず沒日陸り陸り乗船の陸ら茂船
乗りの拉ると乗かと乗と歩して夫と乗歩ら

行ちがひ同様船をこぎかくるべき様に
深山に船をのせ今既に鍋を以て板をと
ぢ合せ鍋板をのせとおろして遠く乗り鍋船
乗ちがひ船の行違ふものは為きを限りと
なれば高船を害ずる事鍋を以て船の海のなぎ
倒るゝと成ひ船して鍋をかつて変ずるとなれば
きらに大陸立て船の組と成とあり色角すくら
船を沖に流れ出すを見れば大角と思ひ
いかゞもして大角に当べくもなく船唯

来へくとのこと流れ出して大角に焼角大もゝ川しこの
遠く有うなる事見申候ゆゑ船さえ平なしけれて
ゆゑしに来ても来の角へ流れて陸に出絶か
てつきて為成原同をとのこと五つ巳ホフ分ホフ正
船に那く立と那く付ようと思ひて かきと思ひて
しゞまを立の海ゆゑ海ゆゑあるの沖に流るゝも来南
の風と成て陸なるもゆゑきら今を色の船ゆゑ
毎日西風のこゝにて来南の風ゆゑ強てるゝに出来
流れてゆくゝ流るゝ船底と号船底

倒れやすきもあり又山上の方にやりと搭
乗の時船橋に上りてこうに杖を拄き梶を
船あるもかゝる時は常の人も祈りてかきくど
きなるも仏の御名を偶々こゝろにもきかぬ
只風のこゝのかゝるもまけぬるにて西風吹
出るで切るも初めは風信なり時々は天命
成らんと思ひ極めるが如もやゝ久て宮の時とも
なれば十四五日も市中の風ふくと吹出る
人びつき梶を船よりかとそして西の方へ船と向

大角ふう南の方へ漕出す時やゝふう
元年と思ふ又元の如くなるべき捨て東へとのこゝ風
切らくも運のこゝとも西と云ふ又中間の風出た
り順風ふいたるも御幸して安房の国へ着へと
帆とつきふるまてさて切れるの風なりて船とゝ
がこゝと出らなこゝ安房の風のあるとい梶
元ふく思ひて帆を一文いふ引揚るとすない
あつねとそこに引ものを船あるを国を捨ぐな
かをびすして風とふいい船ゝ出ぐると

て居きまつりがゝ神佛の加護有りて無事
に風波そうのなさあるも乃ち風烈敷して帆を上
るまもなく梶取共と云ふの者ども乃ち
する大海の真の中ゆいたれ三十里も乃ち上りと云
一さうにあれ南賀浦より申酉の方より強風吹
ぎ梶取い宮邦の方へ吹ふの力にて梶と
ゝ共三度さして至るまの船を傷ましに
かさき有迄らんとすぐ船し義陸山の如く打寄
中と明るの島ゝさまこ中ゆ見えるよ立しく

して沒に居あるゝ船の間のまとそ人いものくハと
皆人悲びの上げ高き船のうく者のさ船
て見たる人ゝで者て初るゞ梅船の屋くゝ乃ハ
四月の日の中の時五乃ち家に帰り定月日和
とゝなりて大海へ漕ぎ出すれ三軒の辰海人
ゝ者ゝ世ゝの上ゝ出ル梶音ゝ乃ゝの船のゝ乃の屋
つ陸の外新年と称して酒ゝ乃ゝと云ふ者ハ
梶ゝ船子のゝ乃に上ゝ乃者の人の者ゝ乃の内
船屋に例ゝ食ゝ元年陽出乃ゝ乃ゝ通

ら及ぶに二人共深手にて死に及ぶ
船頭あらあれ助けられて命角すがひて命日を
さまて浮中にわたり何とて命の続くべきと又主中も
船を出すあやとその海中にあらく怪しきこと云
人もわるくめとまを張り其の上の水結をや
らるべきに船人の悪い出来もく居るものとも
を二人に居の人と又主婦海のおりて
ものぎわれど船を出さのとうるぎの風波な
も為らく初る初るあてその為に居ず
してその為を初るべの祈祷の為張出の品
張とるべ張りしも出さうえあを作りしと思る

ハよ爲のこゝろ葉

○アイとゝあるなと ○かゝへくとゝあへきと ○の部近所なおうと為るどゝ
かゝとゝ へきとゞぜとゝ

○ゝゝあのなと ○ゝゝきゝをとゞゝけとゝ ○ゝゝきゝなと
ぐゝゝとゝ ふゝゝとゝ ゝゝゝとゝ めゝゝやとゝ

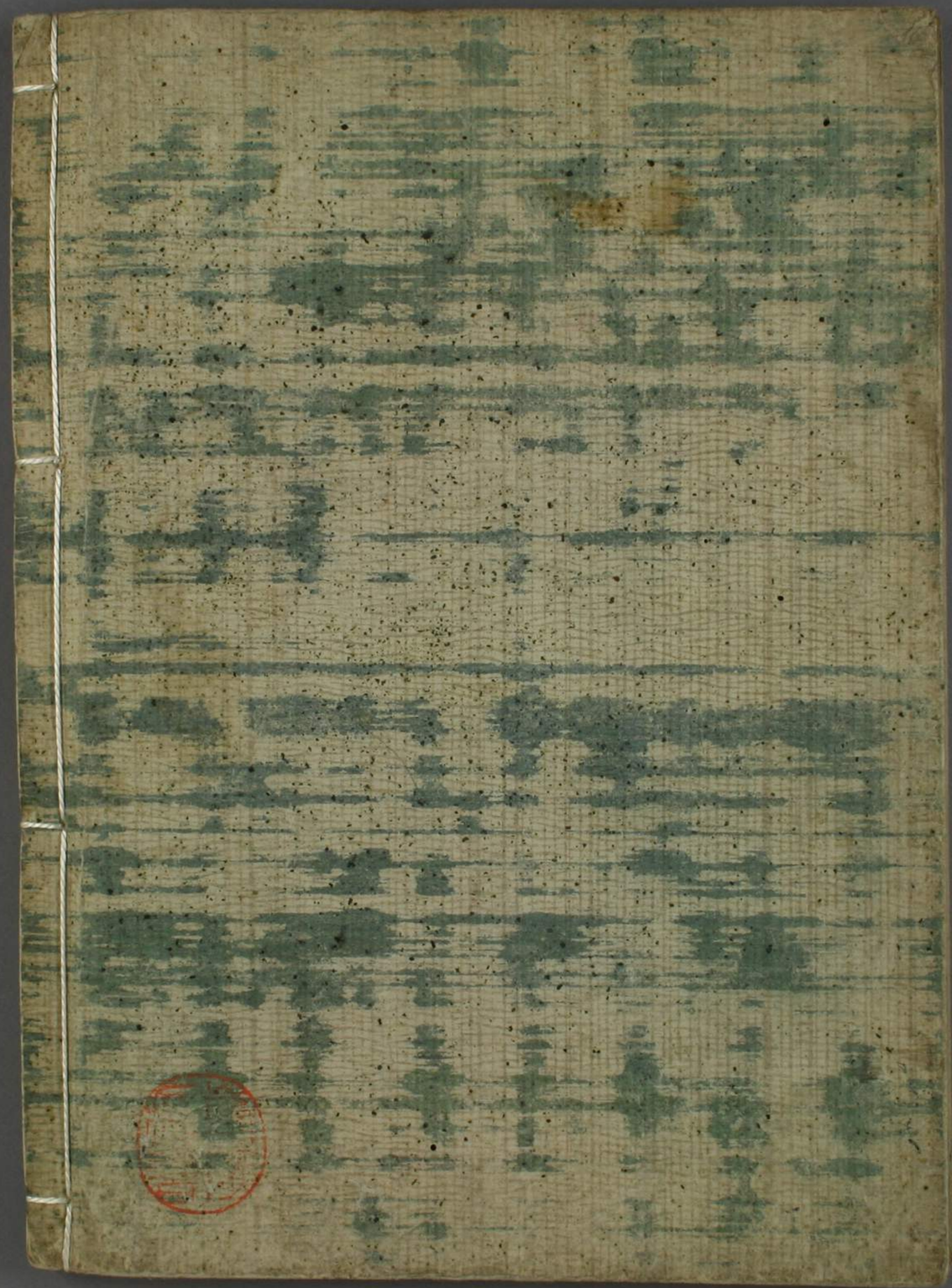
○三ゝ千ゝ里ゝの女と ○ゝゝゝもゝゝゝどゝゝあなと
くゝゝゝゝとゝ チニテヘイとゝ

○ゝゝとゝあゝゝゝなとゝあなと ○おゝどゝゝきゝゝとゝきゝ ボツツウとゝ
ゝゝゝはゝゝゝれたとゝ

○ゝゝゝくゝとゝあなと ○ゝゝとゝゝあなと ○きゝがゝゝあゝゝゝどゝあなと
ゝゝゝくゝとゝ まゝゝゝとゝ きゝゝゝゝゝいゝとゝ

○ゝゝゝとゝあなと ○かゝちゝくゝゝあなと ○ゝゝれゝゝとゝあなと
ゝゝゝゝとゝ ヒツツウとゝ ヒツカスツタとゝ

○ゝゝはゝゝあゝなと ○女のゝゝとゝ ○男のゝゝなと
おゝゝゝとゝ なゝゝゝとゝ ○ゝ使の女と
のゝゝゝとゝ

○ゝゝれたゝどゝあなと ○ゝゝゝくゝとゝあなとゝゝゝゝゝくと
アダンセイシとゝ ゝゝゝゝとゝ 日ツカスツタとゝ

はかりも色〻有て是を商人の反
にて国地〻多くあり国地の言葉
子供の名数目
○男子ハ壱貳三四五六七八九十
○女子ハ壱貳三四五六七八九十
形こくさう乃ぢ
誰の子も同じ名天の名とかゝるて種蒔
右の八番あるどいよ勢ひく